和漢文類

京都府學務課編纂

二篇　上

特279-133
1200501131995
特279
133

始

京都府學務課編纂

和漢文類

版權所有
京都府藏版

和漢文類二編上巻

京都府學務課　編纂

一 青山故大膳亮殿ハ。生得質素なる人にてよろづにつけ志わき人のやうに見え候ひしが或時外より帰らせ候て役人共を召出し誰彼の宅へ参り玄関を見せずて手廣くて自由もよく見え候。自分屋敷玄関ハ殊の外せまく候。假令一間通りひろげ度思ふ也。大工共に入用を積らせ候て見せ候様にと申付らせしに。役人どもも常々志りたき氣風を存じ候故に随分下直に積らせ。金八両にて出来候由を書つけ差出せしを大膳殿ハとくと見らせ候ていやしく無用に致すまじ。八両と申金子にてハ足輕一人を扶助せらるゝことぞとて。普請をやめられ候なりし。然る

特279
133

和漢文類二編上巻

京都府學務課 編纂

一 青山故大膳亮殿ハ。生得質素なる人ゆゑ。よそめにハ志わき人のやうに見え候ひしが。或時外より帰らせ候て。役人共を名出し。誰彼の宅へ参り玄關を見せたるに。手廣くて自由もよく見え候。自分屋敷玄關ハ殊の外せばく候。今一間通りひろげ度思ふ也。大工共に入用を積らせ候て見せ候様にと申付らせしに。役人ども常々志わき氣風を存じ候故に。随分下直に積らせ。金八両にて出来候由を書つけ差出せしを。大膳殿はやく見らせ候て。いやしく無用に致されし。八両と申金子にてある足輕一人を扶助さるゝことぞとて。普請をやめられ候ひし。然る

に尼ヶ崎居城の節。大阪の御城失火に付き。江戸へ早追の使者を以て注進申させ候時。両人の使者を目通り近く呼出し。膝の側に小粒金を紙にゐり置て。両の手にまくひて定めて手當る役人共より申付候なん。是ハ自分がやるぞとて。其余の右の袖へ自身入らる。使の男平伏して退かんと致し候へば。まて〳〵と申させ候て。又両手に一まくひ左の袖へいれられ候よし。両人へ同様に四まくひ給り候ニ付。両人に一入忝存じ。道中にはげみ候て。江戸への注進壹番に着いたし其後大膳殿参府の節。規摸那る上意も有之候よし。且又不断玄關に罝付の長持ひとつ有。内に金千両なるこの金にて以せおかれ。鎖にへ封印になく。當番の廣間番代り合の時分。蓋をあけ見候までにて。受取わたし事濟候より承り傳へ候。君上の心持を此所を能々心得候て。をしへ奉るべきよし所望。（嚶鳴館遺草）

二 家康公駿府の城に御座なされし時。御側に侍坐の衆へ上意有しハ。人君ハよき家老を持べき事なり。我常におもふに主人の悪事ある哉見て。主君の怒をも不顧。諫言をいふ家老を。戰場にて一番鎗をするよりも。遥に勝りたる心なりと謂れし。其子細を敵に向て勝負をするにも身命をかへりみなしぬ事なれども。必敵に討るべきにもあらず。假令討死してにも世に名を殘し。主君にも惜まれぬれば。死しても本望なる事なり。又敵を討取ぬれば主君の感に預り。恩賞を得て子孫までも傳はれば。戰場の働ハ生死ともに心に勇み有べし。夫とハ違ひて

主君の無道なるを歎きて。屢直諫をせず。忠言耳に逆ふ習にて。主君が心に合ぬ程に常に厭ひ嫌はれて。只禮良にてあひしらはれ。日に疎遠になるものなり。それに新進容悦の諂ひもの共。件の家老を事によせて讒する程に。日を逐て主君の目見え悪くなりて。何を言ふても用ひられず。其時はいかなる忠臣も退屈する故に。或は病氣と称し。或は致仕を願ふて。身を引退く分別するぞかし。然るに主君の氣に背くとも構はず。幾度も進み出て極諫しけるが。主君怒を積て手討にするも。又は押籠て出さぬやうにするにて有べし。夫を露も心に懸ず。只我報國の志を盡して終るは。世に有難き忠臣と謂ふべし。是に比すれば戰場の一番鎗は。反て易き道理なりと仰ら

れしとなん。都て人君たる人の。永き鑑戒となるべき御言葉どもなり。（駿臺雑話）

三 曽子曰。戰陣無勇非孝也と。此賢範の心は。恩に酬ひ義理を立るが孝徳の感通なり。君の恩は親が恩に均しき廣大なる恩徳なり。忠臣は必ず孝子の門より出るその故なれば。孝徳明かなる者は。必ず戰陣に於て武勇を勵み功を立るものなり。常々孝行忠節の振ありても。戰陣に臨み武勇の勵みなきは。真實の孝行に非ずと戒め勵ます義なり。程子武學制に孝經を添らせたり。此心は恩を酬ひ義理を立ることを知らざる者は。生れつき才ありても。主君の用に立難し。却て味方の禍になるものなり。然るによつて孝經を教へ。恩に酬ひ義

理を立る本心を明らめさせ。血氣の勇を化して仁義の勇となさしむる為なり。能々体認して孝行の端的を得心あるべし。

(翁問答)

四 放蕩淫縦ノ心ニハ神モヤドリ玉ハズ。權謀ヲ肆ニシ詐力ヲ奮ツテ功利ニノミ外馳スル心ニモ神ハヤドリ玉ハズ唯菜根ヲ咬テ寒苦ヲ忍ビ。本心ニ復シテ君父ノ恩ヲ思ヒ。天地鬼神ノ冥鑒ニ背カザル事ヲ思フ心ニハ神トヾマリ玉フベシ。此ニ止マリテ万事ニ處置セバ。事々皆其至當ヲ得ベシ。左傳ニモ此心不爽昏乱百度ト云ヘルハ尤ノ事ナリ。今ノ人精神昏亂ニメ書ヲ讀ミ道ヲ講ジ。又ハ政事ヲ處置ス。百事ノ紛乱スルコト尤ノコト也ト知ルベシ。

(梧窓漫筆)

五 近き世學問の道ひらけて。大かたよろづのとりまかなひ。さとくかしこくなりぬるから。とり〴〵にあらたなる説を出す人おほく。其説よろしければ。世にこぞりてもてはやさるゝによりて。なべての學者。いまだよくもとゝのはぬほどより。われおとらじと世にことなるめづらしき説を出して。人の耳をおどろかすことを。今の世のならひとす。其中には。ずいぶんによろしき事もまれにはいでくめれど。大かたいまだしき學者の。心はやりていひいでたることは。たゞ人にまさらん。かたんの心にて。かろ〴〵しく。まへ。しりへをもよくも考へ合さず。思ひよれるまゝにうち出るゆゑに。おほくは。なか〳〵なるいみじきひがことのみなり。すべてあらたなる説を出すは。いと大事なり。いくたび

もかへさひ思ひて。よくたしかなるよりどころをとらへ。いづくまでもゆきとほりて。たがふ所なく。動くまじきにあらざれば。たやすくは出さぬわざなり。其時には。うけばりてよしと思ふも。ほどへて後に。今ひとたびよく思へば。なほわろかりけりと。我ながらだに。思はるゝ事の多きぞかし。

新なる説を出すこと 本居宣長（本朝文範）

六 世の物識人の。他の説のあしきを咎むる。ひとむきにかたくなゝるぞ。すべてをも。かの我説をまげぬさまにあげつらひをなすは。多くはおのれが思ひとりたる趣をまげて。世の人の心に。あまねくこのまへんとするこそ。まことにはあらで。心きたなし。たとひ世の人はいかにそしらるゝとも。我が思ふすぢをまげずて従ふべき事にはあらず。人にはほめらるとも。道には。このまるまじきわざぞ。大かたの。一向に偏りて。

他説をばあしくと咎むるをば。心狭くよからぬ事とし。一向には偏らず。他説をもこゝろよしとはいはぬを。心ひろくおいらかにてよしとするはなべての人は心なめれど。必それさしもよき事にもあらず。よる所定りて。其を深く信ずる心ならば。必ずと向にそよるべかれば。それにたがへるすぢをばとがむべきにいかで。よしとして依るところに異なるは。皆あしきなり。これをうけたれば。彼はあしき理ぞこのし。然るを。此もよし。また彼もあしからずといふは。よる所定まらず。信ずべき所をふかく信ぜざるこれなり。依る所定りて。其を信ずる心の深ければ。それに異なるすぢはあしかるべきことをば。おのづからとがめざることをえざれば。これ信ずる所を信ずるまめなるなり。人はいかにも思ふらん。吾は一向にかたよりてあらじ説をばあしと咎むるも。必こゝろしとはあるまじくなん。

一向に偏るちこの論。 本居宣長（本朝文範）

七 問曰權現樣御代小僧三ケ條ト申ス義ヲ。諸役人方ヘ御雜談遊バサレ。御聞セナサレ候トコレ有ル義ヲ世上ニテ承リ候ヒシガ。其元ニハ如何聞及バレ候ヤ。答曰此小僧三ケ條ト是有ル義。世上ニ於テ色々申傳ヘ候由ナリ。我等承ハリ及ビ候ハ。或時權現樣ノ御前ヘ御用ノ義ニ付。諸役人罷出ラレ候節。何レモ儀ハ。小僧三ケ條ト申スヿヲ聞ヲルヤト御尋子遊バサレ候刻ミ。何レモ左樣ノ儀ヲ承リタル義御坐ナク候ト申シ上候ヘバ。然ラバ仰聞ケラルベキトノ上意ニテ。御雜談遊バサレ候ハ。去ル田舍寺ヘ在所ノ旦那百姓来リ。我等子供餘多持候ヘバ。一人ハ御寺ノ御弟子ニ致シ。出家ニ仕度トノ頼ミニ付。頭ヲ剃リ受戒ナド致サセ差置キ候処。或時件ノ小僧親元ヘ逃歸リ候ニ付。師ノ坊主ヨリ呼ニ遣シ候ヘ𪜈歸リ申サズ。其後兩親𪜈ニ来リ申シ候ハ。我等倅ノ義モ最早御寺ヘハ歸シ申間敷候。其許樣ニハ御出家𪜈覺ヘ申サズ。未ダ年モ參ラザル小僧ニ。御無體ナルヿ計御申シ掛ケ候トテ。不足ダテヲ申スニ付。師ノ坊申ケルハ。兩親達ノ頼ミニ付我等ノ弟子ニハ致シ候ヘ𪜈。是非取戻スベキトノ義ニ於テハ。其方達ノ心次第ノ義ナリ。去リナガラ如何ナル子細ニ候ヤト尋ケレバ。親ドモ聞テ申候ハ。小僧義ハ御寺ヨリ歸テ我等𪜈ニ申聞セ候義三ケ條是有リ。第一ニハ朝夕味噌ノスリ樣悪シキ迚御叱リノ由。第二ニハ御坊樣ノヲツムリノ剃樣悪シキトテ御叱リノ由。次ニ大便ヲ致シ候キザミ。雪隠ヘ参リ候ト

テ御叱リノ由。是等ノ義ハ皆以テ御坊様ノ御無理ト申スモノニテ候。年モ参ラヌ小僧ガ小腕ニテ味噌ヲスリ候ニ於テハ。能ハ擂レ申サヌ筈ノヿニテ候。マシテ御坊様ノ御ツムリヲ小僧ニ御剃セ候ニ於テハ。是モ能ハ御坐ナク候筈ノヿニ候。扨又大便ヲ致シ候ニ雪隠ヘ参ラズ。何方ヘ参ルベキモノニテ候ヤト。居丈ケ高ニ成テ罵リ申シ候ニ付。住持ノ僧申シ候ハ。小僧ガ申ス口ヲ誠ト思ヒ。親々ノ身ニテハ左様ニ申サルヽ尤ナガラ。一向左様ニテハ是ナリ候。總ノ味噌ト申ス物ハ。スリ木ヲ以テスリ候筈ノヿニテ候ヲ。小僧ハ杓子ノ甲ヲ以テスリ候ニ付。寺中ニ有ル程ノ杓子ヲバ悉クスリ破リ。剰ヘ我等客來ノ時ノ為メニ。タシナミ置タル杓子ノ甲マデ此ノ如クスリ破リ候トテ。皆々取出是ヲ見セ。扨雪隠ノヿハ程近キ所ニコレ有リ候。常ノ雪隠ヘハ行クヿヲ致サズ。近頃御代官衆在方廻リノ節ハ。當寺ハ宿ニ定マレリ。其時ノ為ト有テ。村中ノ世話ヲ以テ。客殿ノ脇ニ作リ置タル雪隠ヘバカリ小僧ハ参リ候ヲ以テ。無用トハ申スヿニ候。偖又我等ノ頭ヲ小僧ニ剃ラセ候義ヲバ。其方達ハ存ジラレザル義モ有ベシ。小僧ハ剃刀ヲ能ク遣ヒ覺ヘ。己ガ頭ヲモ自分剃ニイタシ。人ガ頼ミ候ヘバ何者ノ頭ヲモ能剃遣ハシ候ニ付。我等ノ頭ヲモ剃ラセ候ヘバ。態ト爰カシコヲ切ハツリ。ケ様ニ頭ウチヲ疵ダラケニ致シ候トナリ。惣ジテ事役ニカヽリ候者ハ。箇様ノ軽キ事マデヲモ聞キ置テ。心得ニ致シタルガヨキゾト。上

意有シトナリ。（落穗集）

八 命をばかろきになして武士の道よりおもき道あらめやも

武歌　源致雅（明倫歌集）

九 我君にいのちをかける玉の緒を何いとひなんもの〻ふの道

武歌　鳥井勝高（明倫歌集）

十 其後藤堂佐渡守高虎ハ神君ノ御下知ニ應ジ鎮西ヘ下リ。朝鮮ノ形勢ヲ窺ヒケルガ。十月朔日ノ戰島津兵庫頭義弘入道維新。同又八郎忠恒。驍勇ヲ奮ヒ。大ニ異賊ヲ破リ勝利ヲ得タリ。是ヨリメ大明朝鮮ノ兵。嶋津ガ武威ニ恐レ敢テ進マズ。故ニ吾兵歸國スルヿ。最モ輙スカルベキ由ヲ聞届ケ。高虎伏見ヘ歸リ演説シケレバ。神君甚タ御喜悦アリ。又德永法印。宮城長次郎豊盛朝鮮ヘ渡海ノ。諸将ノ歸朝ヲ催シケレバ。各々神君ノ御旨ニ應シ。蔚山順天。新寨等ノ諸壘ヲ去テ歸帆セント欲ス。于時明兵弊ニ乗テ軍舸ヲ發シ拒戰スト云ヘ圧。吾兵奮戰シテ遂ニ是ヲ敗リ諸軍釜山浦ヲ引拂ヒ歸帆ヲ筑前博多ノ津ニテヅ繋ギケル。石田治部少輔三成爰ニ在テ諸将ヲ接待ス。加藤主計頭清正一人ハ。先ヅ名島ニ至リ淺野彈正少弼長政ニ謁シ。渠ヲ伴ヒ博多ニ来ル。其翌日淺野石田歸朝ノ諸将ヲ聚メ在陣ノ辛苦ヲ勞ラヒ。且大閤ノ遺言ヲ達シ其遺物ヲ傳フ。諸将是ヲ感謝シ皆涕泣メ止ズ。暫ク有テ三成ガ曰。列侯是ヨリ伏見ヘ往テ。幼君ニ謁ヲ執テ其後分國ヘ下リ。累年ノ困憊ヲ慰アルベシ。重テ上洛ノ期ニハ必ズ茶ノ會ヲ催

シ。互ニ心ヲ慰ント申ケレバ。諸将各挨拶ニ及ブ處ニ。加藤主計頭清正ハ。兼テ石田ト其間不快成シガ。進ミ出高ク呼テ曰。諸侯皆茶遊ヲ設ケラルベシ。某ハ朝鮮ニ屯スル事既ニ七年。今瓶ニ積粟ナク。嚢ニ一錢乏シ。茶モナク又酒モナシ。唯稗粥ヲ以テ各ヲ饗スベシト罵ル。三成憤リヲ含ムト云ヘ𪜈。敢テ一言ニ及バス。斯テ十二月廿八日。石田淺野伏見ヘ歸參シケレバ。此ヨリ嚮諸将モ伏見ニ着シ。秀頼ヘ歸朝ノ旨ヲ告テ。且神君ニ拜謁シ。數年ノ辛苦ヲ休ケル（武徳安民記）從朝鮮諸将咸歸朝之事 附加藤清正廣言之事

[十一] 秀吉小幡ニ趣クトキ。本多平八郎忠勝八百バカリヲヒキヒテ。山ニ傍テ道ヨリ向ヒヲ相并ビテ行。秀吉無類ノ勇将哉。

ナンゾ彼ガ小勢ヲ以テ我大軍ニ當ンヤ。撃バ討ンズレドモ。助置テ後ヲ見ントテ。是ニ取アハズ。後忠勝此事ヲツタヘ聞テ。秀吉ト共ニ鋒ヲ争ベキニ非ズ。然レドモ我ヲ討ントナラバ。大軍ヲ引受。三度モ四度モ衝卻ケセリ合時ヲウツスベシ。其間ニハ先ノ合戰已ニヲハリテ。秀吉後至ルトモ利ナカラン。吾コレヲ慮ルガ故也ト云ヘリ。忠義勇烈而ナガラ備リタル人ナレバ。源君ノ恩遇他ニ異ナルモ理リ也。（武将感状記）

[十二] 今日ノ如キ大變態ハ開闢以來イマダ嘗テ有ラザル所ナリ。然ニ尋常定格ヲ以テ豈ニコレニ應ズベケンヤ。今一戰官軍勝利トナリ。巨賊東走スト雖モ。巣穴鎮定ニ至ラズ。各國交際永續ノ法未ダ立タズ。列藩離叛シ方向定マラズ。人心洶々

百事紛紜トシテ。復古ノ鴻業イマダ其半ニ至ラズ。纔ニ其端ヲ開キタル者ト謂フベシ。然レバ朝廷ニ於テ一時ノ利徳ヲ計リ。永久治安ノ策ヲナサザル時ハ。則北條ノ後ニ足利ヲ生ジ。前姦去リテ後姦來ルノ覆轍ヲ踏セラレ候モ必然ナルベシ。依之深ク皇國ヲ注目シ。觸視スル所ノ形跡ニ拘ラズ。廣ク宇内ノ大勢ヲ洞察シ玉ヒ。数百年來一塊シタル因循ノ弊ヲ一新シ。國内同心合體。一天ノ主ト申モノハ。斯マデ頼母シキ物ト上下一貫。天下萬民感動泣涕イタシ候程ノ御實ヲ舉行セラレン事。今日急務ノ最急ナルベシ。是マデ主上ト申奉ルモノ。玉簾ノ内ニ在シ。人間ニ替ラセ玉フ様ニ。僅ニ限リアル公卿方ノ外。拜シ奉ル事モ出來ザル様ナル御有様ニテハ。民ノ父母タル天賦ノ御職掌ニハ乖戻シタル譯ナレバ。此御根本道理適當シ。右ノ根本ヲ推究シテ大變革セラルベキハ。遷都ノ典ヲ舉ゲラル、ニ在ルベシ。何トナレバ。弊習ト云ヘルハ理ニ非ズシテ勢ニ在リ。勢ハ觸視スル所ノ形跡ニ歸スベシ。今其形跡上ノ一二ヲ論ゼン。主上ノ在ス所ヲ雲上ト云ヒ。公卿方ヲ雲上人ト唱ヘ。龍顔ハ拜シ難キ物ニ譬ヘ。玉體ハ寸地モ踏玉ハザルモノト。餘リニ推尊シ奉リテ。自ラ分外ニ尊大高貴ナル物ノ様ニ思召サレ。終ニ上下隔絶シテ。其形今日ノ弊習トナリシ物ナリ。敬上愛下ハ人倫ノ大綱ニシテ。無論ナル事ナガラ。過レバ君道ヲ失ハシメ。臣道ヲ失ハシムルノ害アルベシ。仁德帝ノ時ヲ天下萬世稱讃シ奉ルハ外ナラ

ズ。即今國々ニ於テモ。帝王従者一二ヲ率シテ國中ヲ歩行キ。萬民ヲ撫育スルハ實ニ君道ヲ行フ者ト言フ可シ。然レバ更始一新。王政復古ノ今日ニ當リ。本朝ノ聖時ニ則ラセ。外國美政ヲ麾スルノ大英斷ヲ以テ。擧行シ玉フベキハ遷都ニ在ルベシ。是ヲ一新ノ機會トシ。易簡輕便ヲ本トシテ。数種ノ大弊ヲ抜キ。民ノ父母タル天職ノ君道ヲ履行セラレ。命令一タビ下リテ。天下悚動スル所ノ大基礎ヲ立テ。推及シ玉フニ非レバ。皇威ヲ海外ニ輝シ。萬國ニ御對立アラセラレ候事叶フ可カラズ。遷都ノ地ハ浪華ニ如ク可ラズ。暫ク行在ヲ定メラレ。治安ノ體ヲ一途ニ居エ。大ニ成ス事アルベシ。外國交際ノ道。富國强兵ノ術。攻守ノ大權ヲ取ル事。海陸軍ヲ起ス事ニ於テ。地形適當ナルベシ。尚ホ其局々ノ論アルベケレバ贅セズ。右國内事務ノ大根本ニシテ。今日寸刻モ忽ルベカラザルノ急務ト奉存候。此儀行ハレテ内政ノ軸立チ。基本始テ擧行フベシ。若シ眼前些少ノ故障ヲ懸念シ。他處ニ移リ候ハヾ行フベキ機ヲ失シ。皇國ノ大事終ニ去ルベシ。仰キ願クバ大活眼ヲ以テ一新シテ。急卒御施行アラン事ヲ。千祈萬禱シ奉リ候。死罪

遷都ノ建議　大久保利通　（明治文鈔）

〔十三〕死棋腹中ニ有勝着ト云コト妙語ナリ。保元ノ亂ニ鎮西八郎為朝ノ策ヲ用ラレテ。其夜御所ヲ焼打ニセンニハ。為朝ノ言ヘル火ヲ逃ルヽ者ハ箭ヲ逃レズ。箭ヲ逃ルヽ者ハ火ヲ逃レズ。夜ノ明ザル内ニ崇德院ノ帝位ハ定ルベキニ。宇治ノ悪

左府頼長ノ。翌日南都ノ僧兵ノ五千人来ルヲ待受テ。合戰ヲ始メントテ其策ヲ不用。翌日義朝ニ逆寄セラレテ。火ヲ放タレテ院方ハ滅ビタリ。是可勝軍ニ負ケタル也。平治ノ乱ニ悪源太義平ノ議ヲ用テ。清盛熊野ノ途中ニテ變ヲ聞テ狼狽シテ歸ル所ヲ、阿部野ヘ馳向テ撃ンニハ。一擧ニ平家ヲ滅スベキヲ。悪左衛門督信頼ノ其議ヲ不用シテ。清盛ハ六波羅ニ歸リ。天子六波羅ヘ潛幸アソバサレ。上皇ハ嵯峨ヘ逃ゲ蔵レタマヒ、テ。源家ハ朝敵トナリテ滅ビタリ。是モ可勝軍ニ負ケタルナリ。是死棊腹中有勝着ナリ。為朝義平不運ニテ亡ビタレドモ實ハ匹夫ノ勇ノミニ非ズ軍略ヲモ知リタル、一代ノ英雄ナリ。義家ノ孫ニ如此ノ英雄ヲ生ジテ。義仲義経ノ大功ニテ。頼朝天下ヲ領スルニ至ル不可思議ノ事ナリ。

（梧窓湧筆）

十四 紀伊大納言頼宣卿ハ。文武ノ賢将ニテ其行跡モ凡人ニアラズ。大坂冬御陣ニ。二條ノ城ニテ大坂表御手遣ノ御備定アリ。頼宣卿十三歳ニナリ給フガ進出玉ヒ。御先手ヲ我等ニ仰付ラレ下サレ候ヤウニト御ノゾミアリ。家康公御感ニテ。城強クシテ先手セメアグミ候ハヾ。其方仰付ラルベシトテ御機嫌ナリ。五月七日大坂落城ノトキ。御旗本後備ニテ尾張大納言義直卿ト。紀伊大納言殿モ御着陣以前。合戰終リ大坂落城ナリ。茶臼山ニテ家康公御前ニ頼宣卿御出有テ。今日御先手ニテ無之ユヘ手ニ合不申。無念至極ニ候ト頻ニ御落涙ナ

サレ。松平右衛門太夫正久申候ハ。今日御手ニ御アヒナサレズ候トモ御セキナサレマジク候。御一代ニハカヤウノコト。幾度モ御坐アルベクト諫マイラスル。頼宣卿聞シ召サレ。右衛門ヲハツタト御ニラミ候ヘテ。我ラ十三歳ノ時ガ又有ルベキカト御申。家康公聞シメサレ。御涙ヲ御浮ヘ御感悦ニタヘズ。常陸殿ソノ言ガ金言ニテ候トノ御稱美ナサレケルト。石川榮入モノガタリ也。

（常山紀談）

十五 柴田小性馬廻り其勢七千余騎。堀久太郎要害東野を押へ對陣せし也。玄蕃允勝に乗引取ざるを悔みいふやう。急引取候へと使者數浪を立。いひやりしかども用ひざりしかば。其道に聞きをれ也と。散々にのゝしり腹立して有し所に。案

のゝしく夜半の頃より。四方物さはがしく成出。何共なふひをめきけへまぬ。是なるいふ様然るべからざる事成べしと。家老共勝家の陣にあつまりて。玄蕃引とらざる事に付て千非を悔きる所に。いまだ其舌のかわかざるに。秀吉前夕夜通しに多勢を卒し。濃州より此表に至り。今暁着陣のよし何方ともなく沙汰しければ。軍中雑説を言。爰もかしこも以外さわぎ出。怯弱なる者共は。多く頓疾虐病に事よせ夜の間に落しもありきらくく色を失ひ度に迷ふ体。そのぐ敷事ハあらじと思ふ所に。余語の海邉に當て。鉄砲の音事々敷鳴出。どよ見あへる聲おびたゞし。弥陣中危からん事急に成。このさまを呑で有し折節。水野小右衛門尉が飛脚来て。玄蕃今暁賊が嶽より退

候得ども。敵ひたと付て危く見え候といひしかバ。勝家聞もあへず左もこそあらんとおもひつれ。さるもあるべけれども是みづから一合戦まじへべしと。勢を備へ待かけ居。痛はしや匠作心な剛に勇め共西の方玄蕃兄弟か勢敗軍に及羸次もなきを見。弥いさむで衆をなげすませども。旗本の勢も又いつ減ざる共なく。わづか三千計に成しかバ。此勢にて利に乗じたる多勢に向ひなん事。いかであらんと長ども申せし哉。修理亮合戦のならひ左はなき物ども。千計にても心を一致なし。十死一生に極め。合戦に及ぶときは勝ものなり。我にまかせよといさ見勢せども。なければ尤なりと請ぬ良ざまなるを。毛受勝介其趣きを見。柴田に申けるは。御意の上とかう申に相似候へども。なを

れはむかし尾州におゐて。度々軍になさせたる下く。あまた持たまひしによつて。其御働も有しかし。今度は見にげ聞逃に数度あひたる下々までおそれまし候故過半落失ぬ。昨日より思名とられし事を。先手の者共いひあざけるも。又下々かくのごとく落ちりしも。皆極運の至りし眼前に候。是によていひがひなき討死をなさせ。名も知ぬものゝ手にかゝり給はゞ。後代までの口をしかるべし。願くは北の庄へ御帰城なさせ。御心しづかに御自害候へ。それがし御馬じるしを請取奉り。御名代に是にて討死を致し候べし。其隊にて急ぎ御帰陣なされ候へ。斯申上候事も。とかく思名候はゞ。見るが内に徒に成べう覚え奉ると。急々に諫しかば。さすがの其道に得たる勝家なれバ。

尤なれとて五幣を勝永に渡し。心にハ有ざれハ毛受に与せよ
と云ながら諸鐙を合せ退しなり。勝永五幣を請取我手の者三
百余人。其外勝家の小性馬廻少々左右に随へ。原彦次郎居た
りし要害幸に明しつれバ。是に取入老母妻子共うたへ。形見の
物を舊功の者に渡し隣の人かしけれバ。かくて盃を出し樽あま
た取ちらし。ききくといひしと聞。皆このもかけあつまりて酌
なりけれバ。追行兵共柴田が馬ありしを見。是に修理亮こそ御へ
たれ。はやバりかきなきと。追行勢を制しとゞむるに過半せり。
又勝家討捕名を天下に揚んといさむにも有てひとくと取巻
し所に。勝永名乗けるは。天下にかくれもなき鬼柴田といはれ
しを我なりとて。あるなりを拂て突て出けれバ。二町ばかり

ずつとおちきたりけれバかゝる所に兄の毛受茂左衛門尉なり
はしりひをしりて有しが此由を聞て。さらバ弟と一所に討死せ
んと思ひ向ひたる敵を追拂ひ来りしが。勝永うせしげにあ
ひつゝ。うやまひ云けるハ。御心ざし返々も忝存候去なから
わまへ討死をとげ候共。此極運をいかでかまぬかれまんや。
貴方ハ老母への孝行に御のき有て撫育しかへよ。左もあら
バいよく御恩賞ふかゝらんずれ。肯手をまはりて詫なせバ。孝行
といひし事尤其理なきにあらず。されども其方を見捨退なバ
汚名世と共に有なん。其上老母ハ其方存のごとく義理を
おもんずる人なり。義理を捨のがれなバ母の心にもさぞかなしまん。いかで
かさる義をけがさんやとて。兄弟共に忠死を極めりしハ。異

朝にも高祖之臣紀信我朝にてハ義經之臣佐藤兄弟等なれる處し。たぐひすくなき事共なり。新手を入かへ〳〵せめ入んと再三しけるに。兄弟其外歷々のさむらひ共おほく有て突退く。息をもさせず戰しか共或ハ手負或ハ討死。殘りすくなく成にけり。勝介兄に向て。勝家退めふて一時に餘りぬ處し。心やすくのきぬひなん。いざ心よく最期の合戰して腹きらんと云まゝに。殘りたる兵十餘人引つれ突て出。散々に相戰ひ追ちらし。其後兄弟腹をぞ切りける。其身は柳瀨の流に沉むといへ共名ハ高峰の雲と立上り今にあり。はつちせ剛の者なれど。其頃も市豎孩童までも口ずさみ候し。勝家府中の城に至り。前田父子に對面し。此中苦勞の一礼ねん比に宣ふ。

極運のせめに遇てかくの如くの次第更に言葉もおよしますさず候。急ぎ湯漬を出され候へとて。心しづかに食しつゝせざる馬を所望しいそぎのへり。利家にもおくり候はんと立出らせしを辞し歸し候ひけるが。又よびかへし。其方ハ筑前守と前々入魂他に異なりかなしば今度の誓約をひるがへし安堵せられせ候へと。云捨てこうせにけり。

評云。勝家至剛なるによつてかく成果て府中の城をとうぬこのふ心もなく立寄。誓約をゆるし侍る事神妙也。又左衛門尉にも送らんと立出しにも又道あり。時にもより人に依て勝家を討安堵を求んか。

勝家敗北并毛受勝助忠死之事（太閤記）

[十六] 体充問曰。聖人五經を論じ給ふ次弟にも意持御坐候や

師の曰深き意有之候。父子は親ハ万化の源。天叙の本なり。君臣は義ハ立極の大義。明倫の主本なり。夫婦の別ハ人倫化生の本。子孫相續は始めなり。此三ツのものは五倫の中まての綱要なる故に。三綱と名づけたり。然る故に三綱を先始めに論じ給ふ。扨三綱の中にて。父子の道を天性にて。君臣の義を包なり。其上五倫の道皆孝行の条目なればハ。孝ハ人極の第一義なるによつて。一番に父子有親と教へ給ふ。君を親の恩に均しき故に。親に事ふる孝を移して。君に事まつる忠節となれ。其上明倫の主本なるによつて。第二番に君臣有義と教へ給ふ。夫婦の別は重しと雖も。君父よりハ賤きによつて。第三番に夫婦有別と教へ給ふ。兄弟ハ天倫の親しひ。骨肉同胞の愛重き故に第四番に長幼有序と教へ給ふ。朋友ハ異親同氣の兄弟なれども。天倫同胞の親しみよりハ軽きによつて。第五番に朋友有信と教へ給ふ。扨又父子の親を始めに置給ひて。朋友の信を終に置給ふ心ハ。孝ハ三極の至要百行の源にして五典ミなて孝行なることを示さん為に。父子の親を始に教へ。扨孝徳を明らにするハ。朋友の善を責むる所輔けとなる事を示さん為に。朋友の信を終に教へ給ふ。曽子の以友輔仁と謂へるも此心なり。畢竟五教皆孝行の教へなり。只凡夫の為に。五典十義を分けて示し給ふなり。至徳要道。三才一貫は心法。能く受用なるべし。（翁問答）

十七　權現様。豊臣太閤ニ御對面ノ時。太閤我所持ノ道具。粟田口

吉光ノ銘ノ物ヨリ。ハジメテ天下ノ寶トイフモノハ集リテ候トテ。指ヲ折リ數ヘ立申サレテ。御所持ノ道具秘藏ノ寶物ハ何ニテ候ヤト尋子申サレ候ニ。シカジカノ物無御坐候由權現樣仰ラレ候。サテ仰ラレ候ニハ。我等ニハ左樣ノ物無之候但シ我等ヲ至極大切ニ思入。火ノ中水ノ中ヘモ飛入リ。命ヲ塵芥トモ存ゼヌ士五百騎所持イタシ候。此士五百餘ヲ召連候ヘバ。日本六十余州恐シキ敵ハ無御坐候故。此士ドモヲ至極ノ寶物ト存。平生秘藏ニ存候由御答アリケレバ太閤赤面ニテ返答ナカリケリ。（常山紀談）

大 朝鮮ニテ秀家ヲ始メ都城ニ在シニ。加藤清正進テ行程數日ヲ隔ツ諸將粮盡ントスル時。加藤遠江守光泰獨云。清正都城ヲ放レテ敵ニ向フ。人々都城ヲ去テ食ニ就ントセバ清正ヲ捨殺スベシ。今コヽヲ去ルモノハ復男子ノ交ハナラジ。清正ヲ捨ン事日本ノ耻ナリトイフ。人々粮既ニ盡タリイカヾセントイハレシカバ。遠江守怒テ砂ヲ喰ンモノヲトイフ。砂ハクハレジトイヘバ。遠江守居丈高ニ成テ。汝等砂ヲ喰ン樣ヲモシラジ。我教ユベキトテ福島正則ヲキツト見テ。イカニ市松イツノ閒ニ大キニ成タルゾヤトテ。秀家ニ向ヒ今マデハ中納言殿ト敬ヒ申タリキ。ケフヨリハ中納言メト申スベシ。清正ヲ捨殺シ耻ヲ異國ニサラス人々ナリトイヒステ、坐ヲ立處ニ。清正粮盡テ都城ニ引退キ三里許ノ逬所ニ陣シタリト告来レリ。遠江守ハ清正ト生死ヲ同ジクセントオモ

ヘルニ。マヌカレタリ。（常山紀談）

〔十九〕一國ノ盛衰果シテ一人ノ賢否ニ由ルカ。余未ダ之ヲ知ラザルナリ。人民ノ智愚果シテ土地ノ形象ニ由ルカ。余未ダ之ヲ知ラザルナリ。邦國ノ成敗果シテ時世ノ運ニ由ルカ。余又之ヲ知ラザルナリ。方今歐州諸國。孛國最モ强ト稱シ。而シテ其人材比斯満耳克氏最モ尤ト稱ス。余曾テ其名ヲ聞キ。未ダ其人ヲ知ズ。歐州ニ副使タルニ及デ。經巡ノ次。伯倫府ニ之キ。親ク其官僚ト相見始テ公館ニ上ル。其眼光烱射威度人ニ加フル者問ハズシテ其ノ比氏為ルヲ知ルナリ。既ニ相接スルニ及ベバ。笑語温藉寛嚴節アリ絶テ圭角ナシ。蓋シ亦希ニ覯ノ偉傑ナリ。退テ人ト語リ益其事業ヲ詳シ。即孛國ノ威風其四隣ヲ凌駕シ。而シテ五州ニ發輝スルモノ。偶然ニ非ザルヲ知ルナリ。所謂一國ノ盛衰。一人ノ賢否ニ由ル者果シテ非カ。其地為ル魯佛ト接シ而メ墺英ト連ナリ。電線鉄路ノ便且捷。商旅賓客ノ盛且繁。新知並ビ争ヒ。奇工迭ニ競フ。所謂人民ノ智愚果テ土地ノ形象ニ由ル者果シテ非カ。其内黨派分裂ノ禍ヲ除シ。外墺佛驍炎ノ勢ヲ挫ク。是固ヨリ諸豪雄略ノ致ス所ニ出ルト雖モ。所謂時世ノ運ニ由ル者果シテ非カ。今日ノ孛國ヲ見ル此三者皆備ハラザルナシ。其歐州ニ雄タル亦宜ベナラズヤ。然ラバ則三者備ハラズ。將ニ其ノ社稷人民ヲ棄テ。而シテ止マントスルカ。否苟モ事ニ任ズル者一致推誠何ゾ必ズ非常ノ材ヲ求ンヤ。國自ラ習慣アリ。特テ以テ基ヲ開ク可シ。

人自カラ知能アリ。率テ以テ材ヲ達スヘシ。短ヲ我ニ捨テ。長ヲ彼ニ取リ務テ教育ヲ敦ウシ。漸ク政紀ヲ修メ。累ヌルニ歳月ヲ以テシ。而シテ勉強怠タラザレバ。則其成就スル亦知ル可キノミ。土地ト時運トノ如キ。言フニ足ラザル也。遂ニ以テ序ス。明治八年八月比斯馬爾克傳序木戸孝允（近体名家文鈔）

二十 柳公權ハ銀ノ盃ヲ主藏ニ竊レタリ。然レドモ哂ッテ曰。羽化シテ去リタルナラン。張文定公ハ銀ノ器ヲソノ奴ニ盜マル。ソレヲ熟視テ其ノ事ヲ問ズ。裴行儉ハ瑪瑙ノ盤ヲ出シテ諸ノ大將ニ示ス。誤ッテ軍吏ニ碎カル。韓魏公ハ玉盃盤ヲ出シテ坐客ニ觴ス。亦誤テ小吏ニ碎カル。サレドモ皆意ニ措カズ。四公ノ汪度ハ褊心ナルモノヲ去ルコト。實ニ相萬々ナリ。（談鋒資鋭）

二十一 あめつちはひらけそめぬる神代よりたえぬ日継の末ぞ久しき　國体歌 前関白左大臣家平（明倫歌集）

二十二 人の身は。父母を本とし天地を初とす。天地父母の恵にて受て生れ。又養はれたる我身なれば。我私の物に非ず。天地の御賜なれば父母の残せる身なれば。慎んで能養ひて毀ひ傷らず。天年を長く保つべし。是天地父母に仕へ奉る孝の本也。身残失ひては仕ふべきやうなし。我身の内少なる皮膚髪の毛だにも。父母に受たれば。妄に毀ひ傷るは不孝なり。況大なる身命を。我私の物として慎まんや。飲食色慾を恣にし。元氣を毀ひ病を求め。生付たる天年を短くして。早く身命を失ふ事。天

地父母へ不孝の至り。愚なる哉人となりて此世に生きてをる。偏に父母天地に孝を盡し。人倫の道を行ひ。義理に随ひて成べき程ハ壽福を受け。久しく世に永らへて喜び樂しをなさん事誠に人の各願ふ處ならずや。如此ならん事を願はゞ。先古の道を考へ。養生の術を學んで能我身を保つべし。是人生第一の大事なり。人身ハ至りて貴とく重くして。天下四海にもかへ難き物に非ずや。然るに是を養ふ術を知らず。慾を恣にして身を亡ぼし。命を失ふ事愚なる至り也。身命と私欲との軽重を能慮りて。日々に一日を慎み。私欲の危を恐るゝ事深き淵に臨むが如く。薄き氷を履むが如くならば。命長くして終に殃ひなかるべし。豈樂まざるべけんや。命短かくせバ天下

四海の富を得るとも益なし。財の山を前に積むとも用なし。然れバ道に随ひ身を保ちて。長命なる程大なる福なし。故に壽きを尚書に五福の第一とす。是萬福の根本なり。（養生訓）

三三 かしこくも照日の本と名はつけたるくもらぬ君をあふる
しるしなるらむ

國体歌 中務卿宗良親王（明倫歌集）

三四 西方ノ大真人ノ言ニ。天地闕欠ノ世界ト説ケリト承ル。是ハ人欲ノ無量ナルヲ悟リテ此言ヲナセリ。誠ニ大智者ノ言ナリ。秦皇漢武ナドノ帝位ヲ践テ別ニ願望ノ無レバ。長生不死ヲ願フニ至ル。都テ天地間ノ人。己ガ心ニ充満ト云フハ無キ事ナリ。是即闕欠ナリ。サテ又此言。人欲無量ノ上ニ就テ説出ルノミニ非ズ。實ニ古今ノ人闕欠ナラザルハ無シ。堯舜ノ

大福大徳ニモ。丹朱商均ノ悪子ヲ生ジ。禹ノ子賢ナレ𪜈其父ハ殛死ヲ免レズ。湯ノ嫡子大丁早世ナリ。孔夫子無レ憂ト嘆賞ナシ玉ヘル。文王モ管叔蔡叔霍叔ノ三不肖子ヲ生ジ玉フ。後世ニテハ。漢祖ハ。其寵愛セル戚夫人趙王如意ノ死ヲ救フヿスラ得ズ。唐ノ高祖ハ。次男ノ為ニ嫡子(太子建成)三男(齊王元吉)ヲ害セラレ。太宗ハ。其太子ヲ殺シ。宋ノ太祖ハ。弟ノ為ニ我子ヲ害セラレ。明祖ハ。太子早世シテ。其子ノ為ニ嫡孫ヲ害セラル。我邦ニテ頼朝ハ。親兄ハ平家ノ為ニ害セラレ。已弟ノ範頼義経ヲ殺シ。二人ノ子。頼家實朝公暁マデ。父子兄弟相害メ家亡ビ。尊氏ハ。嫡子ヲ北條ニ殺サレ。已ハ弟ノ直義ヲ毒殺シ。我子ノ直冬ニハ叛カレ。次男ノ基氏ハ兄ノ義詮ニ忌マレテ自害セリ。匹夫ヨリ天下ヲ有ツ太福ノ人々スラ皆闕欠ナリ。マシテ凢下ノ人。誰カ闕欠ナラザラン。然ルヲ愚ナル人ハ。已ガ福ノ十分ナラザルヲ恚ル。笑フベキノ甚シキ也。闕欠ノ世界ニ生レテ。誰カ如意圓滿ナルベキヤ。唯々仁義忠孝ノ正道ヲ踏違ヘズメ。人倫ノ正ヲ亡失セザル處ニ心ヲ居ヘテ。福分ノ充足ヲ願ヒ。西方ノ大真人ニ哂ハレザル様ニスベキヿナリ。(梧窓漫筆)

〔三五〕學問トハ廣キ言葉ニテ。無形ノ學問モアリ。有形ノ學問モアリ。心學神學理學等ハ形ナキ學問ナリ。天文地理窮理化學等ハ形アル學問ナリ。何レモ皆知識見聞ノ領分ヲ廣シ。物事ノ道理ヲ辨ヘ。人タル者ノ職分ヲ知ルヿヲ学ブナリ。知識見

聞ヲ開ク為ニハ。或ハ人ノ言ヲ聞キ。或ハ自カラ工夫ヲ運ラシ。或ハ書物ヲモ讀マザル可ラズ。故ニ學問ニハ文字ヲ知ルヿ必用ナレ𪜈。古来世ノ人ノ思フ如ク。唯文字ヲ讀ムノミヲ以テ学問トスルハ大ナル心得違ナリ。文字ハ学問ヲスル為ノ道具ニテ。譬ヘバ家ヲ建ルニ槌鋸ノ入用ナルガ如シ。槌鋸ハ普請ニ欠ク可ラザル道具ナレ𪜈。其道具ノ名ヲ知ルノミニテ。家ヲ建ルヿヲ知ラザル者ハ。是ヲ大工ト云フ可ラズ。正シク此譯ニテ文字ヲ讀ムヿノミヲ知テ。物事ノ道理ヲ知ラザル者ハ。此ヲ學者ト云フ可ラズ。所謂論語ヨミノ論語シラズトハ即是ナリ。我邦ノ古事記ハ暗誦スレ𪜈。今日ノ米ノ相場ヲ知ラザルモノハ。コレヲ世帯ノ学問ニ暗キ男ト云フ可シ。経

書史類ノ奥義ニハ達シタレ𪜈。商賣ノ法ヲ心得テ。正シク取引ヲ為スヿ能ハザル者ハ。是ヲ帳合ノ學問ニ拙ナキ人ト云フ可シ。数年ノ辛苦ヲ嘗メ。数年ノ執行金ヲ費シテ。洋学ハ成業スレ𪜈。尚一個私立ノ活計ヲ為シ得ザル者ハ。時勢ノ學問ニ疎キ人ナリ。是等ノ人物ハ唯此ヲ文字屋ト云フ可キノミ。其功能ハ飯ヲ喰フ字引ニ異ラズ。國ノ為ニハ無用ノ長物。経濟ヲ妨ル食客ト云フテ可ナリ。故ニ世帯モ学問ナリ。帳合モ學問ナリ。時勢ヲ察スルモ亦学問ナリ。何ゾ必ズシモ和漢洋ノ書ヲ讀ムノミヲ以テ。学問ト云フノ理アランヤ。此書ノ表題ハ學問ノスヽメト名ケタレ𪜈。決シテ字ヲ讀ムヿノミヲ勸ルニ非ズ。書中ニ記ス所ハ西洋ノ諸書ヨリ。或ハ其文ヲ直

二譯シ。或ハ其意ヲ譯シ。形アルヿニテモ。形ナキヿニテモ。一般ニ人ノ心得ト為ルベキ事柄ヲ擧テ。学問ノ大趣意ヲ示シタルモノナリ。　学問ノ勧第二編端書　福澤諭吉（近體名家文鈔）

丟　寛永の比。越前故伊豫守殿の家老に。杉田壹岐といふ者有。もとは足軽なりしが其身は材をもて微賤より登用せられ。厚禄たまはり國老に列したり。伊豫守殿参覲にて。一年在江戸の内。費用過分なりしを。常に前年より支度して。用度足る様になせるハ。偏に壹岐が功なりしとかや。夫ハ去事にて。常に犯顔直言して。君の過を匡救せる事を怠らず。或時伊豫守殿在國にて鷹狩し。晡時に及で歸城ありしに。家老どもいづれも出迎しに。伊豫守殿殊の外氣色よろしく。家老どもに對して。今日若者共の働きいつに勝れて見えし。何れにても万一の事に有ても出陣させなば。上の御用にも立程しと覺ゆるぞかし。其方どもも承ていづれも喜び候へと有しかバ。家老どもいづれも御家の為に何より目出度御事にて候と云しに。壹岐一人末坐に在けるが。默々として居たりしが。何とぞ云のと暫く見合せられしが。堪へ兼られず壹岐は何と思ふと有しに。其時壹岐只今の御意承り候に。憚りながら歎かはしき御事に存候。當時士共御鷹野などの御供に出候とては。先にて御手討になり候はんも計り難く候とて。妻子と暇乞して立別候と承候。ヶ様に上を踈み候て思ひ付奉らず候てハ。万一の時御用に立べきとは不存候。夫を御存知なく。頼もしく思召さ

なりしに御意にて愚かなる御事にて候へと云しかバ。伊豫
守殿大きに氣色を損じけれバ。何某とかやいひし者。伊豫守
殿の刀持て側に居たりしが。壹岐が坐を立候へと云しを。壹
岐聞て其人をきつとにらみ。いづれもハ御鷹野の御供して。
鹿猿を逐てこそかけ廻るを御奉公とも。此壹岐が奉公ゟさにて
ハふしぱらざる事申なりとて其儘脇指を抜て後ろへ擲捨。伊豫
守殿の側へ進み寄。只御手討に被」遊下され候へ。空しくなが
らへ候て御運の衰へさせ給ふを見候よりハ。只今御手に懸
り候ハゞ。責て御恩を報じ奉る志のたるしと存候なりと云
て。頸をのべ平伏しきるを見給て。何ともいはで奥へ入せけ
り。其跡にて外の家老どもも壹岐に向ひて。御為を思ひて申さ

せしハ尤にて候へども。折も有べき事にて候。今日御鷹野よ
り御機嫌よくて御歸り有しに。御氣先を折らせ候事ハ遠慮も
有べき事にあらずと云しを。壹岐君へ諫を申上候に。御機嫌を
考候てハよき折とてハ無物にて候。今日ハよき序とぞ存
候へ。其上某事ハ御取立の者にて候へバ。各とハわけの違ひ
たる者にて候。御手討に逢候ても其分の事にて候と云ひけ
れバ。諸家老各感じ合ける。扨家に歸りけり。切腹の用意して
君命の下るを待ゐたりしが。日比糟糠の妻の有けるに向ひて其
許に言置事只一つ侍る。御身ハ女の身なれば直に御恩を請
たるにてもなけれども。我御厚恩を荷ふ故に足軽の妻とい
はせし身が。今歴々の妻として大勢の所從に圍繞せられしぞ。

限なき御恩ニ非ずや。然れバ我生害仰付らるゝ跡ニても只
朝夕今ニまで御恩の有難かりし事を忘れずして。假ニも上を
怨ミ奉る心有べからず。若女心ニて我身の物憂ニつけて。上
を怨ミ奉る様なる事を言葉の末ニも露おきなば。黄泉の下
迄も深く怨と思ふべしと云ける。扨今やと待けるニ夜ふく
る程ニ人来て門を叩きしが名あるまゝ登城なさしとなり。
扨は登城と思ひて登城しけるニ直ニ寝所へ召入其方が書い
ひし事心ニ懸りて寝らせぬ間。夜陰なれども呼つるなり。我
誤りたる事ハ兎角言ニ及ばず。其方が心ざしを深く感じ思
ふて満足せる事ニて。直ニ腰の物を賜りしが。壹岐も思
ひ寄らぬ事ニて。不覚落涙ニ咽びつゝ。拝賜して罷出けると

登

（駿臺雜話）

［三七］人情ハ移り易きものニて御坐候。我と我同士の交りニても平
生親ミ候うちハ。其人の風儀をもそれとみまね申候心ハ無之
候へ共いつの間ニか其風儀移り候ものニ候。況てや君上と
奉仰候御方の御風儀ハ。高嶺よりおろし候大風の如く麓の
草木いづれも靡きなびき申すべきや。依之人君御平生篤實質
素を御好ミ被遊候て。假ニも浮花風流なる御物好の無之時
ハ。下ハ自然と飾りをやめて質をまもり候。文學行れ候へば
人々道理ニ明らかニ相成候。武術をはやり候へば華奢風流ニ
ながれ不申候。酒宴乱舞ハ人心を盪し候根元ニて候。節倹の
道ハ費用のかゝる處を防ぎ候事肝要ニ候。扨亦文武と申ハ

と車の両輪の如く。一も廢し候てハ政行れ不申候。其内にも
文ハ讀書にならひ道理を弁へ候道故に。人の頭にあり候人
だに。是に明らかに候へバ。ともかくも下を取扱ひかね不申
候。其下々ハ道理にくらき人有之候ても。頭の取扱ひ次第に
て一生を全し可申ものに候。武の道ハ弓馬劍槍の技を兼候
ものにて。心計武を存候ても。技に長ぜざる時ハ用に立不申
候。又ざにぶる長じ候へバ。上の宰配次第に用をなし候ものと
故に。中以下ハおしなべて不致候てハならぬ道に御坐候。道
理に明らかなる人ハ。身分不相應の驕を致し。非義の立身出
世をも願ひ不申候。技藝を嗜候人ハ飲食衣服の物好き薄く。
未練さもしき追従ハ自然と不仕候。是何の故と申ものも

く。元来好ミ候處。文と武と二道より出るものにて。人の風儀
此二つに御坐候。たとへ聖人の本經に叶ひ不申候ても。人情
をそむき候程の過ハなく候。唯つまる處人情を敗り君を怨
み候事ハ。元來奢靡の心より生じ候義に御坐候。（嚶鳴館遺草）

[二六]日嗣の君ハ開闢以來皇統連綿し。六合に照臨ましまして。
四海萬國に比類なく。尊き　天位なれバ。臣民たらんもの
敬ひ尊び奉らんハ勿論なれども。徒に其義を言て實事を論
ぜざれバ空論にして耳食の陋を免れず。今其実事を論ぜん
には。其施行ある所の事蹟一端なしバ。上古より諸神　天
朝を尊奉し。中世にも名賢輩出して。忠誠を盡し候事鮮少
ならずと雖も。姑く措て論ぜず。東照宮政教を四海に施し給

ひしかも。天下の諸侯を帥て京師に朝し。君臣の義を正しくし給ひ。戰國の餘り　皇室の匱乏なりしも禁垣を増廣修理し供御の田を増し。秘籍寶器の散失せるも還し納め。伶官の舊職を復し給ひ。其他美蹟多き事隨て知るべし。我　威公も神道を崇敬し給ひ。義公神儒を學びたまひ。元旦には京師を遥拜あり。親王公卿に至るまで禮を盡し。名祠大社より里巷於叢祠まで。或ハ修理を加へ。或ハ来由を正し。盡く正礼を行なさしめ。淫祠を毀ち人心を正くして迷はしめず。國史を修して又　皇統を正閏し。華夷内外の名分を嚴にし。礼儀を編纂して　天朝に獻じ給ひし類何れも尊　王の義にあらざるなし。景山先公西山の芳躅を繼ぎ。毫髪の遺失なし。忠誠を盡したまひ。臨時の献納も少なからず。扶桑拾葉の遺意に付。八洲文藻を獻ぜられし類。一々あけて數へ盡し難し。神祇を尊び封内の神官を奬勵して神道を再興し。諸社に神田を寄附し。民に諭して祭祀を愼ましむる類。斯の如く朝廷に誠を輸し。且敬神の事業まで一として尊　王の義を継述したまふに非ざるはなし。是皆尊　王の實事にして空論に非ざるなり。（閑聖湯録）

〔元〕學友問。間思雜慮拂へども生じて制し難し。答て曰。間雜の二字を妄とせず。思慮は絶べからず。只邪なるべからんのみ。程子曰。人は活物なり動作有べし。思慮有べし。邪を閉ぐ時ハ誠自ら存す。則忠信を主ともと云へり。誠ハ無欲なり。思ふ事もなく為

こともなし。寂然不動にして感じて天下の故に通ず。今の人は一己の人欲身の主となり。故に思ふこと天理ならば。動こと義理ならず。思為共に皆妄なり。妄の主を替ずして其末を防ぐとも制し得べからず。間雜を拂ふの念。又心上の累を増べきなり。有念無念共に忘せて。誠を思はんにあるのみ。

（集義和書）

三十　美方ケ原ノ戦ニ甲斐ノ師源君ヲ追コト猶急ナリ。鳥居四郎左衛門内藤四郎左衛門。コレヲ両四郎左ト号ス。二士トモニ源君ニ従テ引ケルガ。鳥居此體ヲ見テ内藤ニ向テ我ハ此ニ蹈トメ敵ヲフセギテ討死セン。貴方ハ殿ヲ助テ退レヨト云。内藤危キニノゾミテ命ヲ殞スハ其所也トイヘドモ。貴方我ヨリ少シ。末々久ク殿ノ為ニ忠義ヲ盡サレヨ。今日ノ撃死ハ我任ナリトテ引返サントスル処ヲ。鳥居内藤ヲ押止メ。忠義ヲ論ゼバ貴方ト我ト同ジ。然レドモ我スデニ言ヲ出セリ。言ヲ喰ハ士ノ道ニアラズ。貴方ト我ト共ニ討死センハ是殿ヲ棄ルナリト制シケレバ。内藤義ニヲレテコレヲ可。味方此ニ捍ギ彼ニサヽヘ所々ニテ闘死ス。其ヒマニ源君盬市口七八町ニナリタル時甚危急ナリケレバ。内藤其子弥九郎ニ謂テ曰。汝殿ノ御命ニカハランヤ否ヤ。弥九郎曰。諾是ノゾム所ナリ。内藤我返シテ討死センコトハ易ケレドモ。殿ニ従ヘル者ミナ若武者ナリ。コノ所ハタヽ猥ナク引取ヲ善トス。若武者ハ血氣剛ケレバ北ルヲ耻トセン。我討死セバ殿カナラズ危カラ

ン。返ス処ハ此地ナリ。返スコトヲ知テ地ヲ知ザルハ利ナシ。此コソ拒ノ地ナレトイサムレバ。孫九郎ソノ詞ノ下ヨリ即引返ス。内藤カヘリミテ愁ル色アリ。弥九郎競ヒカヽル敵ニ馳合セ。撞部ケ遂ニ此ニテ討レタリ。源君退得テ濱松ノ城ニ入タマヘリ。弥九郎ガ首ハ秋山ガ従者塩路ト云者コレヲ得。弥九郎殊ニ力戦シテ敵ヲ斬。塩路ニモ数箇所ノ手ヲ負セタリ。軍散ジテ後。信玄秋山ヲ呼テ。今日何ゾ備ヲミダシテ。北ルヲ逐事法ニ過タルヤト問レケレバ。秋山黒鹿毛ノ馬ニノリ。再拜ヲ腰ニサシ鎗ヲバ持ズヤヽモスレハ還闘ントスル武者アリ。其体嚴ニシテ家康ト見ナシタルニ由テ急ニコレヲ追フト答フ。信玄理アリト云テコレヲ尤メズ。(武将感状記)

【三十】相州北條の幕下佐野天徳寺勇将なりしに。ある時琵琶法師に平家を語らせて聞けるに。いまだ語らぬ先に我ハ唯あハれなる事を聞しことなきゆゑ其心得をよといひしに。法師承候とて佐々木高綱が宇治川の先陣を語り出たりしに。天徳寺雫と涙をながしゝを泣しりけり。扨又今一曲前のごとくなきれあるよしを聞ゑしといへど。那須与市が扇の的を射しる。半に及で天徳寺又落涙数行に及べり。後日側に仕へし者共に過し日の平家なといふを聞つるといふに。皆面白き事に覚え候。但し一ツ心得ぬ事ありて候へ。二曲とも勇氣功名ある事にて。何れあるかなしき事とも候はぬに。君には御感涙にむせびさせられ候。今に不審なる事と申あひ候といへど。天徳寺驚きて。只今迄ハ各を頼母しく思ひ候ひしが今の一言にて力

を落したるぞとよ。先佐々木が事をよく心にうかべて見らせ候へ。右大将舎弟蒲冠者にも賜らず。寵臣の梶原にも賜らぬ生唼を。高綱に賜たるにあらずや。其甲斐もなく此馬にて宇治川の先陣をせずして人に先をこされなば。必討死してふたゝび帰るまじき暇乞して出ける。其志哀なりしことのすぐれて。志ほらしく涙をのごひつゝ。志ばしあはれといひける。又那須与一も人多き中より撰出されて。只一騎陣頭に出しかば。馬を海中に乗入て的に向ふに至るまで。源平両家鳴をしづめみな是を見物せしに。もし射損じなば味方の名折なるべしと馬上にて腹かき切て海に入んと思定めたる志を察して見らせよ。弓箭とる道などおそれある事にあらじ。我ハ毎も戦場

に臨ては高綱宗高が心にて鎗を取候ゆへ。右は平家を聞時も両人の心を思ひやり落涙にむせびけり。然るに各ハ何とてれみなの望しとや。思ふに各の武邊ハ唯一旦の勇氣よりその せる。真実より出るにはなきにやと思はれ候。夫にては頼母しからずとなげきけるとぞ。（常山記談）

三三 博く書をよみ学問しても。くはしく思ハざれバ道理に通ぜずして明らかになりがたく心に得がたし。孔子も学んで思はざればくらしとのたまへり。古今書をよむ人は多けれど。道理を知る人稀なるは書をよみてよく思ハざればなり。思へばよく深き理に通ず。万の藝能も唯法をもとめたるばかりにてますて。思案の工夫なければ。其藝進まざるが如し。思の工夫其

益大なるこのれ。（初学訓）

三十三 楠正成に随し武士のうちに。大塔宮吉野の奥に御難に。食に飢たまひて御難義なりといひしをなげけるて。一命を捨て戦國に臨む武士。たとひ二三日食をぞせずとて何程の事なからん。我と柔弱なる宮のことといひくそぞ。正成うしろを顧てかの武士によむこの志ゆしみて申やう。己ハ朝飯の遅き残食たる事もなき榮耀にれひ育ちたる男なり。事に臨むその腹中空虚になりて働き難きことを知らぬ馬鹿ものぞ。供のうちになる叶ふまじとて勘當せしとぞ。（三省録）

三十四 茨木郡玉道村の中北濱（濱ハ玉道村の内の小名なり）といふ處に弥作といふ者有けり。家至て貧しく。父ハ早く死て老母ありてまのも

腰ぬけてなせり。弥作が性きたれあて愚鈍なれども母へ仕へて孝行成事なをさらく聖人にも恥ぬこのらず。弥作妻も共に心を合せて渡世をいとなみ養ひ居りしに。其妻いつとなく病氣となりて力を合せる事能ざれば。弥作思ひけるは。斯ては母の養ひも都て欠事も有らん迚。心ならぬ事ながら妻を去て母と我と而已住なり。元より田畑も持ざりければ。人の田畑を受作りといふ事なして作り。扨田をまき畑をうがさんとする日ハ。母ひとり家にてさびしからん事を痛み煩ひて。おひのやうなる物をこしみ母をのせて肩前に農具を抱へ。手に母の湯水を助けんが為に食物并に茶碗に茶を入て携へ行。其所に至りぬきぞ。夏ハ涼しく冬ハ暖なる所を求めて母をおろし

居て。田よ𛂦せ畑よあせ一う私二うねうなひぬれバ。母が側へ寄て顔色をうこのぶひ物いひあぐさもん。茶酒食あど望ごよ任せて是を勧め。田畑をうなひける。此母常よ酒を好ミけるゆゑ。日毎よ酒を求めたくもへて貧しからざらしめ。家よ𛂦ミてゐ日夜心を盡せる事筆よ盡し難く。當時延寳の始めつこのこ。西山公此事を聞し召及バせ。南の領へ御出の節。弥作が門よ御立よ𛂦有て彼者を召され。金子二まくひ左右の御手ふあーべて持ぬひ。弥作が頭よ頂らせぬひ。孝行の段御譽遊させ。此金を以て母を心よく養ひ申べく。此金子我𛂦とふるよあらバ。天よ𛂦汝よ𛂦ゐへぬふ所也とて下され。扨所の役人を名給ひ。弥作ハ賤せて愚鈍なる者と聞及ぶあせバ。此金銭人よ奪ひ取るゝ事も有るべし。汝等能計らひ田畑を調へ取らせべし。又向後も私ん𛂦ろよ仕るべきよし仰付らせ。弥作が傳を書せらせけり（西山遺事）

三五 上野國の士人某家よ秘藏の皿二十枚有し。もし是を破るのはらば一命を取べしと世々いひ傳ふ。然るふ一婢あやまちて一枚を破りしらば。合家これ驚き悲しむを。裏よ米を舂男これを聞つゝて。我家よ秘藥ありて破りる陶器を継よ跡も見えず。先其皿を見きぬへといふよ。皆色を直して其男を呼てみきしよ。二十枚をこのさよて怯くくみるふ。りして。こちある杵よて微塵よ碎きり。人々おせろいこのよとあきれたせバ。笑ひていふ。一枚破りるも二十枚破りるも同じく一命を

めさるゝなせそ。皆是が破しるゝと主人に仰らせよ。此皿陶物なれば一々破るゝ期有べし。然らば二十人の命にかゝる哉。我一人の命をこそすてゝはやくのふ為し。継べき秘薬有といひしは偽にて。かくせんが為也と。一寸もおどろかず主人の帰りを待ける。主人帰りて此子細を聞て其義勇を甚感じ。城主へ申上して士に取立られたりしが。果して廉吏なりしとぞ。（開田耕筆）

[三十六] 貝原益軒帰國の海路にて。同船数輩各姓名をとひ近くに及べども。何とぬき物がたりどもをして日を重ねしに。其中一人の若き男人々に對して經書を講ず。先生例の恭々しく黙して是を聴て一言是非を論ぜず。船着岸して各をはじめて

其郷里をたづねし。再會を契て別るゝに臨み。先生は吾は貝原久兵衛と申者なりと名のられ哉聞て。彼若き男大きに恥おそれて速に逃しとなん。（畸人傳）

[三十七] 儒者は皇國の事をとふに八志らずといひて恥とせず。から國の事をとふに志らずといふをば。いみじく恥と思ひて志らぬことも我も志りがほにいひなせり。おほよろづをからぶりのさんとするあまりに。其身をも漢人めかして皇國をばよその國のごとく。もてなさんとするなるべし。されどこのら人にたゞかへしが。御國人なるに儒者とあらんにはそのおのが國の事志らではあるべきかは。但し皇國の人に對ひてさばかりもから人めきてよかんめれど。そも漢國人のとひた

らんには我がなすべくの國の事ハよく知れども。其の國の
ことを知ざるハ。きのふのことをいひとらじをや。又しさるい
ひたしむるに已が國の事をおぼえしらぬ儒者の。いかでか此
人の國の事をしれバ。しるべきとて。手をうちていたくほしかりつ
べし。（玉の都万）

【三十八】赤穂義士片岡源五右衛門高房の家僕を元助といへり。幼
ときより高房の家に畜はれて人となれり。篤實勤行にして事
を執ること甚だ怠らしめず。高房赤穂を去るの日に。この召
しつかふ奴婢にことごとく暇をとらせたり。さりながら元助
のみは留りて去らず。高房に従ひて江戸に来り朝夕薪水の労
を以てたすく。出入事を奉りて餘力をのこさず。その心を盡す

こと昔日に勝れり。たまたま同僚と共に仇を報ゆるの日に
迫りしかバ。ある日元助を呼びていへるに。汝是迄の困阨の間
の久しかるに能よくも勤めたり。されど申聞することの外ならず。
この度ハ仕官を求めて江戸に来りしも。ややくも二年に及べ
り。そのうち何かの資用に嚢金殆盡なり。世の中さまざまを清
くぐとあてどひめぐらをふ。諸侯に士を聘するなく。列國客を
招かざれば。ところかしこにも仕官の道は絶たり。この薦擧の
人もあらざれバ。四方に遊歴して何くの國にも身をよせ。相
識れる方にありかして傳食し。こころ安く生涯を終らんこ
とを思ふなれ。今さらかやうなれど汝に暇をとらするなり。
汝もよりも先の生計のいとなみを心がくべし。今までの諭に

任せざるに。是までは勤仕の労に報ゆることなきのみと。懇々といひ聞せけるなどに。元助の云。かゝること改めの給ハするは何事ぞや。僕事君の為に人となりて侍れバ。君に不幸なる即己の不幸にて候らへ。今さらに君をすてまゐらせて。他のあるじに仕へんこと我誓ひてなさじ。されバ君の往くところへハ僕いかなる方へも従ひまゐらん。かつ織席捆履の力を盡しても。自勉め侍らんといへバ。高房云汝の志しこれいさゝかも疑ふにはあらねど。己今四方に糊口し己が身さら世に容れざるを。況んや汝をさへもに人の食客とならんことあつかひもよからじ。汝忍びて吾言にしたがふべし。されど亦主の為をあつかふなからむやといへバ。元助又云。下賤の僕衣食すとども足り易し。みづから衣食をつとめて決して君の累とせじ。たゞ僕ととでに起居せんことのみなりあしからバ。たとへ居を別にするとも君に離れまゐらせんことおもひもよらじとぞ。動く心なきさまに見えざりければ。高房もおしこのへしく喩しけれども。心を決してのく去るべき氣色ハなかりけり。こゝに於て高房殆せんかたなく。陽り怒りて詞あらゝかに。汝事吾に久しく随ひありし故に。汝が志を空しくせざるからに。好語をなして暇を遣したり。そを窮らざるのみならず。なほさらに告るの外なし。それも去年赤穂を退去の後。汝が平生の所為旧時に異なり。これも困窮をいとふのみならず。汝が動静云為一として意にかなはざるぞ。これによりて暇をと

らざるなれど。速に去れといふを聞て。元助涕泣して僕幼ちた君に仕へて已に十有餘歳。一日も未だ曾て君の念たがふ色を見ず。今さら斯る事をうけたまはるは僕世にあることかひあらねど。其の命も今日に限りとて趨り行しかど。高房心もとなくてあとべにつきて。ひそかに事のやうを伺ひけるに。やがて自殺に及んとせしかど。あわてとゞめ刃を奪ひ叱して云。奴こゝろから紛擾を生じ。何ぞ不忠をなさと咎むれど。答云。願くは君の恵にて己れをして死しめたまへかし。僕もとより君の為に世にあり。誰が為にこの生を貪らんといふに。高房手だてなくて隣人をやとひ。元助を守らしめて。自ゆきて同僚數輩をともなひ来り。顛末を語りていのぞませんといへば。坐を擧げてみな彼が志しを感じぬ。あはれとて云。仇を撃のことを告なりとも。いやまたあらじとて。高房。元助を呼び同僚とはかる事甚だ密なりといへども汝が志にめでゝ。やむことなく告げ知らするなり。前には辭を他事に託せしなり。恨むことなかれとて。復讎のよし我告げ知らせければ。元助のよろこびいはんかたなく。有難くもかゝる密事を己れの如き下賤にしらせたまへること。君恩に尊卑の別あることなし。仰ぎ願くは死をともにせんといふに。高房云。かねて大石君の我がともがらにかたく戒めさせて。單身の外は奴僕を從ふることを許されず。かゝれど汝一人の故をもて衆人の契約をそむかんやといへるに。元

助も理りに伏し。とかくの言なくて謹みて命を承り奉りぬ。さて僕が従ひまいらせんと希ふハ。寸忠だにも盡さんとおもへばなり。君の為になしまゐらんとて銭敢てなきをべきにあらば。今こそ本望を遂げん夜を。一刻千金のおもひにて待ちはべらんとて去りぬ。さて復讐のこともをはりしをりこそ。何くよりか來りけん。拂曉高房が出るを待受け。一筥の蜜柑を捧げ持て。諸君さぞめて昨夜のはたらきに渇しなりけん。いざまゐらせよと。彼蜜柑をおのおのにあたへ。泉岳寺までつきそひ行き。滂泣してぞ別れける。かくて高房死を賜ふまでの間。ある侯に志なし何ほどころ。元助が事を常にものがたりて涙を催しけるぞ。その侯もその忠節義氣をふかく感じ給ひ。物色してあまねく尋ねさせられけれども。終にその行方しれずとなん聞えし

(名家畧傳)

三九 千早振神代のむかし神々しき秋津しまなる其尊き日の本は。清き光りは古へより今に千とせに萬代に。末の松山かへらぬ君が御代なるを。こゝらのいさやしき波の。よせくるあだなき異國の。志ともあき船の夷らが。はからぬ謀ぎ事はとくく。この引國の心とて。御國のおしへをみなからに。すえくしる者あらなくば。わすれ心よぬすむ玉のくるき間部をこのみちひて。世によなくひなき御功をえ。澤によはせどもあやまちを。露なおもさぬ聖なる。かし君を退けて。黄のなる真玉を春山の。花散るおもくきえちらし。晴るるくもの井を

曇らなる。なくこは程のたまはしと。浮世の人は言の葉を。聞も苦しき老の身ハ。五十の四になりぬれど。七十三は老の母。朝夕さらば仕へ侍る。別れてふ事をうれしくも。共にをる孫をそへられて。我國の為君の為。あくせなとり紫あはしくも。老の言葉を力草。露も含める朝ぼらけ。日な立のおる衣手の。常陸の國を立出て。敷島の道ある御代をおもひつゝ。行なるのへるなも梓弓。なるけき道をさらごのよの。糸なたゆまば引そへて。雲の上までかゝる橋を。渡るおもひを天下る。鄙に生れし塵の身は。塵ほそるてふ山の井は。深き心のこなそしも。流れて清き真清水の。中にをみぬる魚おもひ。賤しき身をもうまれ侍る。皇國の為と朝夕に。心をちぶみ砕けども。只一すぢに由く水の蟬は小河にこゑぎしを。なるべく来ぬる旅衣。暁ほぐる黄鳥の。野末ににほふ梅ヶ香を。風のたよりに久かたの。天津そらまで聞えあげ。ゆるしをまちてなる九重の。雲井の神に奉るなり。

返歌

玉鉾の道をあはれとまちみゆくやまと心の駒ハなゆまし

たのせ道にかゝるけそしき橋たそく人こそとも我ハ渡らし

たつき嶋のこゝちなそる身ハさくこゝふの雲井の庭に引たきまで

空家女（興風集）

四十 辱知生山縣有朋頓首再拜謹デ書ヲ西郷隆盛君ノ幕下ニ啓ス。有朋ガ君ト相識ルヤ茲ニ年アリ。君ノ心事ヲ知ルヤ又

蓋深矣。曩ニ君ノ故山ニ歸養セシヨリ已ニ數年。其間謦咳ニ接スルヲ得ザリシト云𪜈。舊雨ノ感ハ豈一日モ有朋ガ懷ニ往来セザランヤ。圖ラザリキ一旦滄桑ノ變ニ際遭シ。反テ君ト旗鼓ノ間ニ相見ルニ至ラントハ。君ガ歸郷セシヨリ以來。世論ノ麑島縣士ニ於ル。其異狀ヲ云々スルモノ。概ネ皆曰ク西郷其謀主タリト。曰ク西郷其巨魁タリト。有朋獨リ之ヲ排斥シテ然ラズトセシニ。今ニシテ乖離ス。嗚呼復何ヲカ言ハンヤ。雖然竊ニ有朋ガ見ル所ヲ以テスレバ。今日ノ事タル勢ノ不得已ニ由ル也。君ノ素志ニ非ザル也。有朋能ク之ヲ知ル。夫レ君ノ徳望ヲ以テ鹿児島壯士ノ泰斗タリ。寔ニ君ニシテ初ヨリ異圖ヲ懷カバ何ゾ其名ナキヲ患ンヤ。何ゾ其機ナキ

ヲ苦マンヤ。而シテ今日薩軍ノ公布スル所ヲ見ルニ。罪ヲ一二ノ官吏ニ問ハント欲スルニ過ギズ。是果シテ擧兵ノ義名ニ適セリト云ハンヤ。佐賀ノ賊先ニ誅セラレ。熊本山口ノ叛後ニ敗レ。天下ノ士民ハ漸ク自省ノ志ヲ立ントス。是果シテ揭旗ノ好機ヲ得タリト云ハンヤ。君ノ老練明識豈之ヲ知ルニ難カランヤ。而シテ今日アリ。君ノ干リ知ル所ニ非ザルヲ見ルニ足ル也。說者曰ク。天下不良ノ徒ハ竊ニ西郷ガ山林ニ韜晦セシヲ奇貨トシ。功名ヲ萬一ニ僥倖スルノ念ヲ懷キ。其時勢ニ阻隔スルノ機ニ乘ジ。百方其辭ヲ巧ニシテ朝廷ノ政務ヲ讒誣シ。人心離散シテ黎民其生ヲ聊セザルガ如キ妄況ヲ虛構シ。西郷出ズンバ蒼生ヲ奈何セン。西郷ニシテ義兵ヲ鹿

児島ニ擧ゲ。人民ノ塗炭ニ坐スルヲ救ハント欲セバ天下皆靡然之ニ應ズベシト。慫慂セシモノ蓋一ニシテ足ラザル也。西郷ノ卓識ヲ以テ。其虚構タリ讒誣タルヲ洞察スルニ難カラズト云ヘ𪜈。奈何センヤ浸潤ノ致ス所ハ衆口以テ金ヲ爍シ。遂ニ西郷ヲシテ今日アルニ至ラシメタリト。聽者皆之ヲ然リトス。而シテ有朋獨リ之ヲ然リトセズ。蓋シ君ニシテ此志アラバ單騎ニシテ輦下ニ来リ。從容利害ノ在ル所ヲ上言スルニ何ノ妨アランヤ。君モ亦固ヨリ之ヲ知ラザルニ非ザルベシ。是有朋ガ説者ノ言ヲ聽テ君ノ志ヲ得タリトセザル所以ナリ。思フニ君ガ數年ニ育成セシ壯士輩ハ。初ヨリ時勢ノ眞相ヲ確知シテ。人理ノ大道ヲ履踐スルノ才識ヲ欠キ。或ハ

不良ノ教唆ニ慷慨シ。或ハ一身ノ轗軻ニ悒欝シ。不平ノ怨嗟ハ一變シテ悲憤ノ殺氣ト成リ。再變シテ砲烟ノ妖氛ト成ル。君ノ名望ヲ以テスルモ尚之ヲ制馭ス可カラザルニ至ル。而シテ其名ヲ問バ則曰ク。西郷ノ為ニスル也ト。其議ヲ聽バ則曰ク。西郷ノ為ニスル也ト。情勢已ニ迫ル。斯ノ如ク夫レ然矣。君ガ平生故舊ニ篤キノ情交ニ於テ。空シク此壯士輩ヲシテ徒ニ方向ヲ誤リテ死地ニ就カシメ。獨リ餘生ヲ全フスルニ忍ビズ。於是乎其事ノ非ナルヲ知テ壯士ニ奉戴セラレタルニ非ズヤ。然則今日ノ事タル。君ハ初ヨリ一死ヲ以テ壯士ニ與ヘント期セシニ外ナラザルガ故ニ。人生ノ毀譽ヲ度外ニ措キ。復天下後世ノ議論ヲ顧ミザル而已。噫君ノ心事タル寔ニ悲

シカラズヤ。有朋ガ君ヲ知ノ深キヲ以テ。君ガ為ニ悲シムヤ亦太タ切ナリ矣。雖レ然事既ニ今日ニ至ル。之ヲ言フモ益ナシ。君何ゾ早ク自ラ謀ラザルヤ。交戰以來已ニ數月ヲ過グ。兩軍ノ死傷日ニ數百。朋友相殺シ骨肉相食ム。人情ノ忍ブ可カラザル所ヲ忍ブ。未ダ此ノ戰ヨリ甚シキハナシ。而シテ戰士ノ心ヲ問ヘバ敢テ寸毫ノ怨アルニ非ズ王師ハ兵隊ノ武職ニ依リ。薩軍ハ西郷ノ為ニスト云フニ出デズ。夫レ一國ノ壯士ヲ率ヰテ天下ノ大軍ニ抗シ劇戰數旬挫折シテ猶未タ撓マズ。又以テ君ガ威名ノ實アルヲ示スニ足レリ。而シテ君ガ麾下ノ將校ニシテ善戰フ者ハ概子死傷シ。薩軍ノ復為ス可カラザルヤ明ナリ。將タ何ノ望ム所アリテカ徒ニ守戰ノ健闘

ヲ事トスルヤ。説ク者ハ必ズ曰ハン。西郷ハ事ノ成ラザルヲ知ルト云ヘドモ。其餘生ヲ永クセンガ為メニ。千百ノ死傷ヲ兩軍ノ間ニ致スヲ憖マザル也ト。有朋固ヨリ其然ラザルヲ知ルヲ以テ。君ノ為ニ之ヲ痛惜セザルヲ得ズ。願クハ君早ク自ラ謀リ。一ハ此擧ノ君ガ素志ニ非ザルヲ證シ。一ハ彼我ノ死傷ヲ明日ニ救フノ計ヲ成セヨ。君ニシテ其謀ル所ヲ得バ。兵モ亦尋テ止マンノミ。嗚呼天下ノ君ヲ今日ニ毀譽スルヤ極レリ。寃ノ存スル所ハ自ラ然ラザルヲ免レズト云ドモ。想フニ君ノ心事ヲ知ル者モ亦獨リ有朋ノミニ非ズ。何ゾ公論ノ他年ニ定ムル所ヲ慮ラザルヤ。故舊ノ情ニ於テ有朋切ニ之ヲ君ニ冀望セザルヲ得ズ。君幸ニ少シク有朋ガ情懷ノ苦ヲ

明察セヨ。揮レ涙草下。不レ得レ盡レ意。頓首再拜。

與西郷隆盛書　山縣有朋

（近體名家文鈔）

【四十二】奥州白石の城下より壹里半南に才川といふ驛あり。此才川の町末に高福寺といふ寺あり。奥州筋近年の凶作に此寺も大破に及び。住持ありても食物乏しければ。僧も不住明き寺となれり。本尊だに何方へ取納しにや寺には見えず。庭も草深く誠に狐梟のすみかともいふも餘りあり。此寺中(コシヨウ[?])に又一ツの小堂あり。俗に甲冑堂といふ堂の書付には故將堂とあり。大さ纔に二間四方斗の小堂也。本尊だに右のごとくなれば。此小堂の破損はいふまでもなし。やうやくに椽にあがり見るに。内に佛とてもなく只婦人の甲冑して長刀を持たる木像二ツを安置せり。いかなる人の像にやと尋るに。佐藤次信忠信二人の妻なりとかや。其昔義經鎌倉殿の義兵をあげ給ふを聞。秀衡にいとまもらして鎌倉へ趣き給ふ時。佐藤庄司我子の次信忠信を御供に出せり。其後義經京都へ攻登り平家を追落し。一の谷八島などにてさもかりの大功をたてたまひて。再度奥州へ来りたまひし時。はじめつき従ひて出たりし。龜井片岡など皆無事にて歸國せしに。次信は八嶋にて能登殿の矢先にかゝれり。忠信ハ京都にて義の為に命をおとし。兄弟二人とも他國の土となりて。形見のみのこりしを母なる人。いかなしき歎きて無事に歸り来る人を見るにつけて。せめて一人なりとも此人々のごとく歸りなバなど泣沈みぬるを。兄弟の

妻女其心根を推量し。我が夫の甲冑を着し。長刀を脇ばさみ。いさましげに出立。只今兄弟凱陣せしと其俤(オモカゲ)を学び老母に見せ其心をなぐさめしとぞ。其比の人も二人の婦人は孝心あつきに思ひしにや。其姿を木像に刻みて残し置しとや。嗚呼兄弟の人は古今ためしすくなき忠義武勇の士なり。其人にはぢざりし婦人又希代の孝女にて。夫婦忠孝の勝れしも世に珍らしき事なり。余此物語を聞此像を拝するに。そゞろに落涙せり。かくばかりの里人の鑑ともなる貴き孝婦の像は。かくあれはてたる小堂の雨風をだに防ぎかねて。彩色も落失せ。僧だに守らで香花を供する人もなく。年月に荒れ行きつゐには跡かたもなくなりなむ。是等の事をも語り傳ふる人もなくなりなんを。誰ありて何がしといひて一銭の奉物をだに供ずる人も無きぞ。世には忠孝に感ずる人のすくなきにや。あまりにあはれに覺えしかバ委敷書付歸せり　甲冑堂(東遊記)

四十二　梅の木に梅は花のひらき。櫻は木に櫻の花の咲候ハ。天地自然は道にて候。梅の木に櫻のはなをさかせ櫻の木に梅の花をひらかせ候事ハ。造化の巧にても出来ざる義に候。然バ。其花を見て其木を知り候事定まりたる義に候。但し[illegible]の咲と申すも両種御坐候。根本の恵ふかき木にさき候花ハ。いろにも色美しく咲候て。さかりも久しく。其上花も十ひらき候へば。實ハ八ッ九ッ結び申候根本の恵うすく。身木いたみて候へば。花ハ澤山さき候ても。いろはやなくかれ候て。さかりも

短く花が十ひらもちり候ものハ八ツ九ツ迄むしろ花のみにて實なとハ是不申ものに御坐候。仍之植木を好候人ハ。根本の養ひを專一にして。身木の榮を悦び花の澤山につき候を嫌ひ申候。花を不愛にハ無之候へども。むしろ花多くちらせバ。身木のやせ候を嫌ひ候故にて候。素人ハ花ども多く咲候へバ。一春一秋の盛を愛し悦候ゆゑ。身木もたもち不申候。家國の風儀ハ草木の花の如し。しまりたる國ハ實多く花少し。ゆるまりある國にハ。花のみにて實なし。是ひとへに根本の君徳なき也。あるハせある花實にて候。故に賢明の君上に在をハ。下にまでなる風俗なく。實儀なる氣立多し。暗愚なる君上に在をバ。下にまでなる風俗多く。實儀なる氣立少し。國の興衰ハ風俗の厚薄により候事故に。人君たるもの風儀を世話やきなさるべきことにて御坐候。風俗を引立候源ハ。文武二道をはげまするより外ハ無御坐候。文道行せ候へバ。孝悌忠信仁義禮讓の風儀多く。武道行せ候へバ。質素敦朴篤實廉耻の風儀多く相成事に候。風儀正敷なれバ富足の元。風儀怠弱なるハ貧窮のもとに御坐候。

（嚶鳴館遺草）

和漢文類二編巻之上終

終